

齊藤里恵はいかに美談を超えたか？  
—筆談ホステスのエクリチュール—

How Rie Saito's Narrative Transcends Mere Praiseworthy Anecdotal Status  
A Study of Hitsudan Hostess Écriture

大江 光子  
OE, Mitsuko

摘要

Rie Saito's autobiography *Hitsudan Hostess* caused a sensation in 2009. As its title shows, this book describes the author's life as a Hostess with a hearing disability and uses written languages as a communication tool. Since its publication, readers have posted their reviews on websites, where they share their experiences of being inspired and emotionally moved by the story. In other words, they read the text as a praiseworthy anecdote despite that being a hostess has long been a stigmatized occupation. Saito's disability could possibly help erase the occupational stigma and make her praiseworthy anecdote an "inspiring story." However, as her continued success shows, her work was not only consumed as an inspiring story, which tends to be forgotten quickly. Rather, it transcended its status as a merely praiseworthy anecdote. The current study will investigate the power of Saito's written language that has brought about this transition by employing Derrida's theory of *écriture*.

In this paper, I will first discuss how Saito's autobiography has become a praiseworthy anecdote by examining the online book reviews from the readers. Secondly, by employing an Australian disability rights activist Stella Young's concept of "inspiration porn," I will illustrate how the expectations of non-disabled people towards people with disabilities have made Saito's autobiography a type of inspiration porn. Then, based on theories of *écriture* by Derrida, Barthes, and Compagnon, I will examine the power of Saito's written language that made it possible for it to transcend its merely praiseworthy anecdotal status. Finally, I will discuss how her writing style and her voice render the *présence* to her *écriture*, which has been otherwise split from *parole*. With her hearing disability, the lack of *parole* has paradoxically given her both *présence* and an iteration beyond the *présence* at the same time.

キーワード： 障害 ホステス ステイグマ デリダ エクリチュール

**Keywords:** Disability, Hostesses, Stigma, Derrida, Écriture,

## 1. はじめに

2009年、聴覚障がいを持ちながら、筆談を駆使した接客で銀座の高級クラブの人気ホステスとなった斉藤里恵の自叙伝『筆談ホステス』が話題をさらった。本テキストは、後述するようにマスメディアに度々取り上げられたこと、マンガ化・ドラマ化されたことも相まって広く社会から注目を集めることとなった。斉藤は2009年5月に本テキストを出版した後、同年9月に、顧客や同僚との実際の筆談でのやり取りを収めた『筆談ホステス 67の愛言葉 青森一の不良が銀座の夜にはぐくんだ魔法の話術』、翌年10月には、自身の出産経験を綴った『筆談ホステス 母になる ハワイより61の愛言葉とともに…』を続けて上梓し、一躍時の人となる。斉藤の活躍はこれだけにとどまらず、2009年には青森市観光大使第一号に就任、その後も講演会活動やテレビ出演を続け、2015年には東京都北区議会議員選挙に出馬し、過去最多票を得て当選、政治家へと転身するのである。

『筆談ホステス』が出版されたとき、読者は「感動」「感銘」したと感想を書き、本テキストを美談-聞く人が感心するような、美しい話。立派な行いについての話<sup>(1)</sup> -として消費した。例えば、読書メーターには「強く芯のある女性として生きていくその姿に感銘を受けます」(suzu, n.d., 読書メーター)、「希望を持って生きる姿に勇気を頂きました」(おっしょう, 2009, May 5, 読書メーター)といった感想が並ぶ。アマゾンレビューにも「逆境にめげずに力強く突き進んでいく齋藤[原文ママ]さんの姿に感動し、また励まされました。」(J5, 2009, December23, Amazon.co.jp review)と書かれている。

従来、ホステスはスティグマ化された職業である(大江, 2020)。それにもかかわらず、斉藤の自伝は美談となった。このことは、斉藤が聴覚障がい者であることと深く関わっている。しかし、その後の斉藤の継続的な活躍を見れば、斉藤は単に一過性の美談として消費されただけではないことがわかる。斉藤の著書が、美談を超える可能性を有したとするのならば、何がそれを可能にしたのだろうか。本論文では、筆談という行為が生み出す書字-エクリチュールの特性の中にその可能性を検討する。斉藤の筆談行為が生むエクリチュールには、どのような力があるのだろうか? また本テキストは、書籍という形態において、いかにして筆談のエクリチュールの力を機能させたのだろうか? 斉藤のエクリチュールの特性を、デリダのエクリチュール論を用いて明らかにしたい。

本論文では、初めに、スティグマ化された職業であるホステスという仕事に就いた斉藤の自叙伝が、いかに美談となったのかを読者のレビューを参照しながら論じる。次に、障がい者表象に関する先行研究を整理した上で、健常者が障がい者に対して抱く期待と、ホステスという職業の捉え方とが関わっている様子を炙り出していく。ここでは、「感動ポルノ」という概念を提唱したオーストラリアの障がい者運動のアクティビスト、ステラ・ヤングのスピーチを参照し、「感動ポルノ」の文脈で読むということが読者の読みにどのような影響を与えるのかを検証する。続いて、斉藤の筆談行為が生み出すエクリチュールはいかなる力を持つのか、デリダ、バ

ルト、コンパニョンのエクリチュール論を援用し検討する。最後に、「感動ポルノ」の文脈に収斂されることのない余剰としての齊藤のエクリチュールの機能について考察し、『筆談ホステス』がいかに美談を超えて、その後の齊藤の活躍を支えるに至ったのか、考察を試みたい。

## 2. 美談としての筆談ホステス

『筆談ホステス』の著者である齊藤里恵は、病気の後遺症により、1歳10ヶ月で聴力を完全に失い聴覚障がい者となったという。高校を中退して働いていたエステティックサロンを19歳で辞め、その後知人の紹介で青森県の繁華街でホステスとして働き始める。23歳の時に一度ホステスを引退し、上京してOLとなるが、仕事が合わず数ヶ月で辞めてしまう。そして「今、私にできることはホステスしかない。筆談ホステスしかない」(齊藤, 2009a, p.176)と、再度ホステスとして銀座のホステスクラブで働き始める。本テキストには、齊藤が生まれてから人気ホステスとして活躍するまでの25年の半生が、齊藤の語りの形式で1.2.3.4.6.8章に綴られている。また、5.7章では、ホステスとしての接客業務に関して、実際のシチュエーションの説明や、顧客と交わした筆談の内容、「筆談のテクニック」(齊藤, 2009a, p.171)が紹介された。本テキストについて、新聞各紙は「筆談ホステス、銀座に生きる 聴力失った25歳、ひたむきさ人気」(中野, 2009)、「自叙伝「筆談ホステス」を出版した 齊藤理恵さん」(吉田, 2009)、「半生をつづった「筆談ホステス」出版 齊藤里恵さん 障害者にも隠れた能力がかならずある」(小島, 2009)と、特集記事を組み、またテレビメディアは「何もしゃべらずに銀座 No.1 ホステスになった25歳魔女」(2009, 日本テレビ)、「金スマ波乱万丈 筆談ホステス齊藤里恵」(2009, TBS)と、プライムタイム枠で特集番組を組むなど、マスメディアがこぞって取り上げた<sup>(2)</sup>。本テキストは発売から2週間で1万6000部を売り上げ、さらにこうしたマスメディアの効果も相重なり、累計39万部のベストセラーとなる<sup>(3)</sup>。翌2010年には、『筆談ホステス ～母と娘、愛と感動の25年。届け!わたしの心～』<sup>(4)</sup>としてドラマ化され、新年明け初めの日曜夜9時、新春ドラマ特別企画枠で放映されることとなった。このドラマは、当時「スター女優」<sup>(5)</sup>と呼ばれた北川景子が齊藤役を演じたことでも話題を呼び、ビデオリサーチ<sup>(6)</sup>によると、関東地区世帯視聴率は12.2%であったという。また、現代用語辞典『情報・知識&オピニオン imidas』は、2010年新語流行語の中の、流行・ヒット商品カテゴリーに「筆談ホステス」という語を掲載している。以上のことから、広く衆目を集めたと言える。

松田(2006)の定義によれば、ホステスとは「一般にバー、キャバレー、ナイトクラブ、そのほかの施設で、接客、接待することに従事する女性を指す」(p.177)。松田は、ホステスのステイグマに関して、「かつての女給がそうであったように、「色気」を売り物にするホステスもこのような「不貞」、「淫ら」、あるいは「売春」といった「エロ」と地続きのイメージ」(松田, 2004, pp.108-109)、「「まともでない」仕事・商売イメージ」(松田, 2010, p.133)から逃れることはできないと指摘している。2014年には日本テレビが、東京・銀座のクラブでのホステス経験を理由

として、女子アナウンサーの内定を取り消したことがニュースとなった<sup>(7)</sup>。その際日本テレビは、採用取り消しの通知書において「傷がついたアナウンサーを使える番組はない」、「高度の清廉性が求められるアナウンサーの採用過程で、ホステス経験を申告しなかったのは虚偽申告にあたる」(千葉, 2014)と説明したという。ここに、ホステスという職業経験を「傷」とみなす言説、過去一時でもホステスという職業に従事した経験がある者を、「清廉性」が欠如した者とみなす言説がある。以上のように、ホステスは「不貞」「エロ」「まともでない」「傷」「清廉性の欠如」などといった負の属性に還元するカテゴリーとして働き、一般にスティグマ化された仕事と考えられてきた。

では、スティグマ化された職業であるホステスとして従事する様子が綴られた斉藤の自伝は、いかにして美談となったのだろうか。斉藤が一躍脚光を浴びるきっかけとなった自叙伝『筆談ホステス』を、読者がいかに読んだのかを見ていくことで、その疑問に答えてみたい。本テキストを美談として読む読者は、その解釈の過程で、斉藤の職業に関する語りをいかに読んだのか。ここで、以下のレビューに着目する。

「ホステスの職業の本質とは、相手の話を聞き、癒しを与え、元気づけること」

(Anonymous, 2009, October 18, ブクログ)

「お客様を楽しませ、心に安らぎを与える心遣いを見習いたい」(Anonymous, 2009, July 4, ブクログ)

「ホステスという、お客の心をつかみ、ほぐす職業で成功を収める、これはどれほど大変だったことだろう」(buso, 2018, October 7, 読書メーター)

「ホステスの仕事は、細やかな気働きが必要なのだな。誰でもできる職業じゃない。「お客様の立場になる」できそうでできない。すべての仕事に必要なだよなあ。」(カーズ, 2019, January 9, 読書メーター)

読者は、ホステスという職業は顧客に「癒し」や「元気」、「安らぎ」を与える仕事、「細やかな気働き」を必要とする職業だと述べている。本の袖にも、斉藤は現役の人気ホステスであると紹介されているにも関わらず、『筆談ホステス』の読者の感想・レビューにおいて、斉藤にスティグマは付与されていない。言い換えれば、本テキストの読者の消費活動において、ホステスという職業はスティグマを与える属性として機能していない。それだけではなく、ホステスという職業は、顧客を「癒し」「元気づけ」る仕事として、美談の一部となっているのである。

### 3. 「感動ポルノ」としての筆談ホステス

このように齊藤の自伝が美談となったことと、彼女が聴覚障がい者であることは無関係ではない。では、障がい者の経験は、どのようにして美化されるのだろうか。ここで、障がい者が美化され感動と結びつけられる様を表現した「感動ポルノ」という概念を中心に、筆談ホステスについて論じてみたい。「感動ポルノ」とは、障がい者運動のアクティビストであり、アナウンサー、コメディアン、ライターとしても活躍したステラ・ヤング<sup>(8)</sup>が、2012年に自身が編集長を務める *RAMP UP* というオンラインマガジン上でアップロードした ‘We’re not here for your inspiration’ (Stella, 2012) という記事において初めて提唱した言葉である。ヤングは、その後2014年4月に TEDxSydney に登壇し、‘I’m not your inspiration, thank you very much’ (Stella, 2014) というテーマで講演した。その折、「健常者を感動させ、やる気を起こさせるために、障がい者をモノ化し、利用すること」(要旨、著者訳)を「感動ポルノ (inspiration porn)」と表現した。

「感動ポルノ」について特集が組まれた『季刊 福祉労働 第一六一号』において、好井(2019)、荒井(2019)、玉置(2019)、矢吹(2019)、宮澤(2019)は、障がい者がいかに表象されたか、またいかに表象されるべきかに注目した。先行研究の多くは、同様の視点から、障がい者表象と社会や時代背景といったコンテクストとの関係、表象の歴史や様々なメディアにおける表象の違いに関する考察、いかなる障がい者表象がありえるのか、どんな障がい者表象が書かれてこなかったのか、といった様々な論点を差し出してきた。こうした研究は、障がい者表象の新生面を切り拓いてきたといえるだろう。しかし、このような視点からの研究においては、表象が受け手の中に意味を生成する過程が見落とされてはいないだろうか。障がい者表象そのものが本質的に意味を備えているのではない。写真・映画・小説などといった表象を解釈するのはその受け手であり、その意味は受け手の中で生成される。そういった意味において、障がい者の表象を問題とするならば、受け手の意味生成の過程に目を向けることも重要である。このような問題意識は、いかに障がい者の表象の意味が受け手の中に生成されるのかといった視点を差し出すだろう。こうした視点からの研究として、塙の一連の研究(塙, 2015; 2018a; 2018b)が挙げられる。塙(2015)は、映画における障害者表象の分析において、障害の医学モデル／社会モデルといった枠組みで表象を捉え直すことの限界を示唆し、「観客による作品読解の次元」という視点を取り込んでいる。また塙(2018a)は、障害者のお笑いパフォーマンスにおける身体の虚構性が不確定であることと、障害者の社会的な認識の相関について論じた。著者は、塙(2015; 2018a; 2018b)と問題意識を共有し、『筆談ホステス』の読者が、障がい者の自伝である本テキストの意味を生成する過程に着目する。

「感動ポルノ」に関するステラ・ヤングのスピーチに関して、前田(2016a; 2016b)は、「感動“ポルノ”」と言うからには、まずやはり、それを観る側・消費する側の自己満足(=自慰行為)のための「ネタ(=オカズ)」と言うニュアンスが示唆されています。と同時に、単に受け手のみならず、送り手と受け手の、メディアを介した「共犯関係」そのものが批判の対象として含

意されているはずですが」(2016b, p.71)と、受け手の解釈の問題にも言及している。しかし、その帰結として、「感動ポルノ」の問題点は「感動ポルノ」が、メディアを通して「あるべき障害者像」を流布し、強固にしている点」(2016b, p.71)と、「障害者が、社会の作り出した不利を「克服」すべく「努力させられている」と言う側面を「感動」が隠蔽してしまう点」(2016b, p.72)だと論じている。ここに、受け手側の問題点への問いが置き去りにされてしまう。「感動“ポルノ”」という「送り手＝受け手のメディアを介した共犯関係」を問題化するのならば、受け手側の問題も考えなくてはいけない。前田(2016a; 2016b)以前に、障がい者を感動の物語の中で消費することについて論じた倉本(2000)は、メディアが作り上げる障がい者をめぐる物語が「感動の物語」(p.90)といった共通構造を持ち、そうしたメディアからのメッセージが人々の中に身体化され、「人々は障害者の語る言葉やふるまいの中に、かの物語(著者注;「感動の物語」)を期待し、そこから快楽を引き出そうとする」(p.90)ようになっていったと指摘している。ここで、受け手側の「感動の物語」への期待という問題について言及されたことは意義深い。確かに、倉本(2000)が述べるように、障がい者へのそうした期待は、メディアが流布したという一面もあるだろう。また、そのような意味において前田(2016a; 2016b)のように、メディアの障がい者表象の問題を指摘することも重要な意義がある。しかし、どのようにその無意識の期待が作られたのかという原因を探っても、確実な原因に辿り着く事はできないのではないか。そうではなく、障がい者に対する期待が、障がい者表象の解釈においていかに機能し、どのような解釈が生成されたのかを明らかにすることも重要であろう。

では、健常者が障がい者に抱く期待とは何か。ヤング(Stella, 2014)は講演の冒頭で、学生時代に普通の日常生活を送っているだけであるにも関わらず、コミュニティの功績賞にノミネートされた自身の体験について語る。そして、健常者が障がい者に、一方的に意味を読み込んでいることに疑問を投げかけ、健常者が障がい者に抱く期待を指摘した。ヤングの指摘は以下の三点に整理できる。まず第一に、障がい者は、「素晴らしい人間である」という期待。第二に、障がい者は「感動的な話をするモノである」という期待。第三の期待は、障がい者に対する程度の低い期待である。健常者がこうした期待を抱き、障がい者の日常を「感動ポルノ」として消費していることをヤングは批判した。

聴覚障がいを持つ斉藤が、顧客とのコミュニケーションの手段として用いたのが筆談である。「筆談」とは、口で話す代わりに、紙などに書いて問答することであり、聴覚障がい者のコミュニケーション方法のひとつとして広く知られている。Amazon.co.jpの商品ページ<sup>9)</sup>においても、本テキストは「聴覚障害を持つ青森一の不良娘が独自に編み出した“筆談術”だけで銀座NO.1ホステスに成り上がる苦闘のすべてを描いた感涙必至の青春ストーリー」と紹介されており、また『筆談ホステス』を取り上げた新聞は、「聴力失った25歳」(中野, 2009)、「障害者」(小島, 2009)と記事の題の中に記すなど、聴覚障がい者の自伝であることが明確に示された上で、本テキストは紹介されてきた。このように、「筆談」という語から始まる書名と、マスメディア

の効果によって、読者は読む前から、聴覚障がい者の自伝であることを理解していると考えられる。このような状況で本テキストを手にする読者は、読む前から本テキストを「感動ポルノ」として消費することを欲望しているのではないか。ここで、読者が障がい者に抱く期待が、『筆談ホステス』の語り、ホステスという職業の解釈にいかなる影響を与えたのかを検討する。

ホステスは男性顧客を誘致し、接客することを職務としている。そのためホステスは、様々なテクニックを駆使してより多くの顧客を誘致し、売り上げを伸ばすことがその職務の目標となる。本テキストの中で齊藤は、「初めてお店にいらっしゃったお客様の席についてホステスが考えるのは同じことです。「どうしたらまたお店に来ていただけるのか？」みんな知恵を絞って自分をアピールしたり、お客様の気持ちを盛り上げようとします。」(齊藤, 2009a, P.148)と、ホステスとして、いかに顧客を誘致できるかを考えていると明確に述べている。また齊藤は、彼女に好意を抱く顧客を、トラブルを起こすことなくつなぎとめる術は「ホステスが身につけておかなければならないテクニック」(齊藤, 2009a, p.108)であると述べ、さらに第5章「私の秘筆談術」では、顧客をもてなすための様々な戦略的なテクニックを明らかにした。例えば、「ときにホステスは何も知らないフリをすることも必要。お店は私たちのステージです。女優のように役に徹して、お客様に喜んでいただくことが大切なのです。」(齊藤, 2009a, P.159)と、顧客が好む女性像を徹して演じるという戦略について語っている。以上のように、本テキストには、齊藤がホステスとして従事する様子が詳細に綴られている。

しかし、このようにホステスの職務を果たす人気ホステス齊藤に対して、読者はスティグマを与えない。それだけではなく、「ホステスの職業の本質とは、相手の話を聞き、癒しを与え、元気づけること」(Anonymous, 2009, October 18, ブクログ)と、ホステスという職業自体が脱スティグマ化されている。ここで、ヤングが論じた、健常者が障がい者に対して抱く三つの期待と、読者の読みとの関係について考察を試みたい。齊藤はホステスとして、顧客誘致という目的のもと、戦略的なテクニックを使って顧客と接していることを明示している。それにも関わらず読者は、齊藤の言葉が顧客に「癒し」や「元気」、「安らぎ」を与えたという一面のみにスポットを当て、その言葉の根源にあると容易に予想できる、売り上げのため、顧客をつなぎ止めるためといった目的から目を逸らす。読者が抱く、障がい者は「素晴らしい人間である」という期待、「感動的な話をするモノである」という期待を満たすためには、齊藤が顧客にかけた言葉の背後にある職業的目的は不可視化される必要があるだろう。そうする事で、ホステスという職業は、齊藤の美談の一部となることができる。また、読者の感想の中では、ホステスに付与される「不貞」「淫ら」「売春」といった「エロ」と地続きのイメージが綺麗に消えている。そもそも実際に、「不貞」や「売春」といった行為が他人に目撃されることはなく、ホステスのそうしたイメージは言説によって作られているに過ぎない。障がい者は「素晴らしい人間である」という読者の期待は、そもそも言説でしかないそうしたホステスの負のイメージをないものとし、さらに齊藤を脱性化するのである。また、障がい者に対する程度の低い期待は、高度

に計算された戦略的な職務上の演技を、彼女の天性のものという解釈に導くのではないだろうか。例えば、斉藤は第5章「私の秘筆談術」の中で、「体調が悪そうな方には、無理にお酒をお勧めするのは絶対にNG・その日の売り上げも重要ですが、お客様には長いお付き合いをしていただくことの方が、何よりも大切だからです。」(斉藤, 2009a, p.161)とホステスとしての戦略を紹介している。文字通りに読めば、一時的にその日の売り上げは下がってしまったとしても、顧客を長くつなぎとめるために、体調が悪そうな客に無理にお酒を勧めるべきでないと言われている。しかし読者は、この一節を引用し「こういう「相手のこと」を考える点が、結果、「間接的に」数字を積み上げるんでしょね」(のちもち, 2011, September 13, Honto レビュー)と、感想を綴っている。つまり、体調が悪い人に無理にお酒を勧めないという行為の動機を、顧客をつなぎ止めるため、から「相手のこと」を考えているから、へと読み替えているのである。こうした斉藤の行為の動機の読み替えにおいても、障がい者への期待が働いていると考えられる。

以上のように、『筆談ホステス』を「感動ポルノ」として消費したい読者の欲望は、ホステスに対するスティグマを払拭することに貢献したと言えるかもしれない。その欲望は読者に、斉藤のホステスという職業の語りのなかに素晴らしい人間性を見ることを強い、感動的な話として読む無意識の努力を要求してきた。つまり、『筆談ホステス』を障がい者の自伝として流布する販売戦略、そして「感動ポルノ」として消費したい読者の欲望が、美談という一つの解釈へと導いてきたのである。

しかし、『筆談ホステス』は、美談として消費されるに終わらなかった。筆談ホステスは一時的なブームにとどまらず、10年後の今でも斉藤は自身を筆談ホステスと名乗り、そのことが斉藤の今の活躍を支えている。では、いかに『筆談ホステス』は単なる一過性の美談を超えたのか。「感動ポルノ」としての消費に還元されることのない余剰を、どこに見出すことができるのだろうか？本論文では、これを筆談という行為が生む書字-エクリチュールの特性において検討する。次章では、筆談という行為が生むエクリチュールがもたらす新たな読みの可能性を切り拓くことを目的として、斉藤のエクリチュールについて論じる。

#### 4. 筆談ホステスのエクリチュール

デリダは、論文「署名・出来事・コンテクスト」(Derrida, 1990/2002)において、伝統的言語学理論が前提としている、書字としてのエクリチュールの本質的特性が様々な言語活動にもみられると論じ、エクリチュール(書字)とパロール(話し言葉)を脱構築した。デリダは、エクリチュール特有の本質的特性の内に、エクリチュールの模倣可能性と反復可能性を挙げている。デリダが指摘する、エクリチュールのこの模倣可能性は、引用という実践に現れる。エクリチュールのこの特性に関する考察をさらに推し進めたデリダは、あらゆる言語活動が共通に持つ引用的な構造に関して「引用」として同定可能でなかったならば、パフォーマンスは成功し



うるであろうか」(p.45)と問い、あらゆるパフォーマンスな言語—すなわち意味するという行為を遂行することのできる言語の引用的な構造に着目するのである。デリダは特に言語の持つ機能に着目し、言語の持つ引用的な構造について論じたが、テキストの根源に関して言及したバルトは「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(Barthes, 1966/1979. pp.85-86)と述べ、テキストの持つ引用的構造の特性について論じている。そしてテキストとは、「いくつもの文化からやってくる多元的なエクリチュールによって構成され、これらは、互いに対話を行い、他をパロディ化し、異議をとらえあう。」(pp.88-89)と論じ、その多元性の収斂する場として読者を位置付けた。コンパニオンもまた、エクリチュールを引用行為であると指摘し、以下のように述べる。「あらゆるエクリチュールは注釈であり相互注釈であって、あらゆる言表行為は反復である」(Compagnon, 1979/2010. p.13)。つまり言語活動は、それ自身において、引用的な構造を内包しているのである。このような意味において、エクリチュールに根源はなく、オリジナルな発信者というのにも存在しない。齊藤は筆談において、他者のエクリチュールからの引用を多用する。つまり、齊藤のコミュニケーションも、エクリチュールの模倣性の上に成り立っているのである。したがって、齊藤は彼女自身のエクリチュールの根源とは言えない。

しかしながら、齊藤のエクリチュールは、齊藤の言葉として流通する。筆談メモを受け取った顧客にとって、齊藤の言葉は、齊藤が語った言葉としての付加価値を帯びる。これを可能にするのは、コンテキストの力に他ならない。例えば齊藤は、顧客である某有名病院の外科医である S 先生との筆談による接客についてこう書き綴っている。S 先生は、アフリカの紛争地で医療の仕事がしたいとの自身の夢のことで思い悩んでいたという。齊藤は、筆談による S 先生との会話の中で「チャンスは貯蓄できない」(齊藤, 2009b, p.22)としたため、S 先生はこの筆談メモをふところにしまい持ち帰った。S 先生に贈った筆談メモは、著書の中で齊藤の直筆で再現されており、その下に地の文で「これはアサヒビールの元社長である樋口廣太郎さんの言葉で、常に前向きでいたい私が大切にしている言葉のひとつです。」(p.22)と、他者のエクリチュールからの引用であることが示されている。そして後日談として、海外へと赴任した S 先生から数ヶ月後に送られてきたエアメールに「あの時自分は、本当に迷っていてどうしていいのかわからなくなっていました。でも理恵さんのかけてくれた言葉のおかげで、今ここにいます。」(p.23)と書かれていたことが紹介されている。齊藤が S 先生に贈った筆談メモに書いた言葉は、他者の言葉の引用であり、オリジナルの言葉ではない。しかし、S 先生はその言葉を「理恵さんのかけてくれた言葉」と言い表している。そしてその齊藤がかけた言葉が、S 先生の決断を促すある一定の力を持っていたとも書かれている。S 先生にとっては、その言葉がたとえ他者の言葉の引用であったとしても、齊藤が S 先生のために書いたというコンテキストが大きな意味を持つ。そして引用された言葉は、「理恵さんのかけてくれた言葉」として付加価値を帯びるのである。このエピソードは、エクリチュールがコンテキストから切り離されたのち、別のコ

ンテクストに関連づけられうることを示していると言える。

エクリチュールが持つコンテクストと断絶する力について、デリダは次のように述べる。「書かれた記号は、そのコンテクストと断絶する力、すなわち、それが書き込まれる瞬間を組織する諸現前の総体と断絶する力を含んでいる。この断絶力は、偶然的な述辞であるどころか、書かれたものの構造そのものである」(Derrida, 1990/2002. p.26)。すなわち、エクリチュールには、それを生み出した者が〈言わんと欲すること〉の存在、書かれた時の環境や、書き手の経験などといった様々なコンテクストが、全く失われたとしても、読解可能であるという性質が備わっている。これはつまり、現前する指示対象からの分離を意味している。ここでデリダが強調したいのは、エクリチュールの反復可能性である。デリダは、「このマーク（著者注；書かれた記号）は、経験的に規定された主観が所与のコンテクストにおいて発信ないし産み出したものであるにせよ、この主観の不在において、またこの主観の現前を超えて反覆を引き起こすことができる」(p.26)と述べる。すなわち、エクリチュールには、読み手だけではなく、書き手も不在であるが、このような不在を超越してエクリチュールは何度も読むことができると論じるのである。斉藤は顧客との会話において、メモに書くことによってコミュニケーションを図るが、その会話において使用したメモが残る。斉藤は、接客において、筆談をコミュニケーションツールとして用いるわけだが、筆談のメモを受け取った顧客らはそのメモを持ち帰ることができることが、通常ホステス・クラブで行われる口頭のコミュニケーションから最も差異化される点である。別のエピソードの中で「Gさんは、そのメモ帳に書かれた言葉をしばらく見つめていると」(斉藤. 2009b. p.37)と斉藤が語るように、書かれた文字はその場においても、何度も読み返すことができる。さらに、「S先生は、そのメモをふところにしまわれました」(p.23)、「優と書かれたメモを1枚お持ちになって帰られました」(p.39)と顧客が筆談メモを持ち帰ることもあったと語る。メモを持ち帰った顧客は、何度もそのメモを読むことができるのである。ここにエクリチュールの反復可能性がある。

持ち帰られたメモは、ホステスと顧客との会話といったコンテクストから断絶される。このことは、デリダが、「コミュニケーションの地平との断絶」(Derrida, 1990/2002. p.25)と述べたエクリチュールの特質に、合致している。デリダは、エクリチュールの「核心的な諸特徴の不可避的な帰結」(p.25)として、「諸々の意識ないし現前のコミュニケーションとしての、および〈言わんと欲すること〉の言語学的ないし意味論的な移送としてのコミュニケーションの地平との断絶」(p.25)を指摘した。そして「意味論的地平や解釈学的地平が少なくとも意味の地平としてエクリチュールによって破裂させられる限りで、そうした地平からあらゆるエクリチュールは差し引かれる」(p.25)と論じている。たしかに、持ち帰られたメモは、書かれた際のコンテクストを離れてどのような形にでも解釈することができるだろう。こうした、多様な解釈を促すエクリチュールの力を斉藤のメモ書きは有していると言えるだろう。

しかしデリダは、エクリチュールにおけるコミュニケーションの現前性については、疑いの

目を向ける。なぜなら、デリダの理論においては、発信者も、受信者も不在であるからである (p.25-26)。エクリチュールにおけるコミュニケーションが、かろうじて現前するとすれば、「署名という形式」(p.52)においてである。

「書かれた署名が記し付けるのは、今一般、今性の超越論的形式において署名者が現前していたということである。(中略)それゆえ署名の出来事と署名の形式の絶対的な特異性であり、純粋な再現＝複製〔再生産〕なのである。」(p.49)

齊藤は、筆談メモに、署名をするわけではない。しかし、大抵の場合齊藤は顧客の目の前で書いているのであり、この書くと言う行為が齊藤のエクリチュールに現前性を与えている。このようにして、顧客にとって齊藤のメモは、齊藤の「純粋な再現＝複製〔再生産〕」(p.49)を持つことになる。齊藤のメモは直筆である故に、彼女の文字には物質性がある。この物質性も署名と同様、エクリチュールに現前性をもたらしている。

そもそも、こうした筆談を始めることとなった原因は、齊藤に聴覚障がいがあったからである。ホステスの仕事は、顧客とコミュニケーションをとることである。パロールを持つことができないという意味において、齊藤は不利な状況にあったといえる。実際に、齊藤を雇い入れた銀座のホステスクラブのママは、『筆談ホステス』のコラムの中で、「ホステスの仕事はお客様の話を聞くのが仕事です。(中略)肝心なお話が聞けないというのは大きなハンディだと思いました」と述べている。(望月, 2009a, p.188)それでも齊藤は、「筆談のメリットを最大限に活かすこと」それこそが、耳の聴こえない私がホステスとして成功する唯一の道」(齊藤, 2009a, p.100)と述べ、筆談を活かした接客に自身の生き残り戦略を賭けた。この筆談行為について、齊藤は「時にはそのメモ帳の紙片がラブレターになったり、その場にいるお客様と女の子たちみんなまで回し書きをして楽しむ交換日記になったりと、結構便利に活躍をしてくれる」(齊藤, 2009a, p.97)、「筆談だとかえって大胆なことが言える」(p.98)、「話し言葉では伝わりづらいものでも、文字やイラストにすれば大笑いできるネタにもなる」(p.100)と、そのメリットについて言及するが、齊藤のエクリチュールはそれ以上の機能を果たしたのではないだろうか。

## 5. 美談を超えて

では、齊藤の著書はどうだろうか。前述したように、『筆談ホステス』は、その内容紹介において繰り返し聴覚障がい者の自伝であることが紹介されており、それによって読者に「感動ポルノ」として消費する欲望を喚起してきた。しかし、本テキストは、読者に感動という目的のもとに消費され、後に忘れ去られてしまうただの「ポルノ」では終わらなかったのである。

『筆談ホステス』には、彼女の心の中の言葉、そしてホステスである齊藤と、彼女の顧客との筆談を用いた会話が綴られている。ここに綴られた心の中の言葉や会話は、エクリチュール

によって再現されたものであり、ホステスクラブという元のコンテキストからは切り離されている。しかし、本テキストは読者を元のコンテキストに引き込もうとする。本テキストにおいて、彼女の心の中の言葉や、彼女が実際に顧客に渡した筆談メモは、印刷用のフォントではなく、彼女の手書きの文字になっている。この手書きの文字は署名と同じ機能を果たしているといえないだろうか。つまり、この手書きメモは、顧客に渡されたメモと同じ効果を持つものであり、オリジナルのコンテキストから引き離されるのを拒む。このエクリチュールに含まれる地の文と差異化された斉藤の筆跡によって、読者は斉藤の現前性を意識せざるをえなくなる。デリダが述べるように、そもそもエクリチュールは「諸現前性の総体と断絶する力」(Derrida, 1990/2002.p.26)を持ち、あらゆる現前性を超えるものである。しかし、印刷用のフォントとは異なり、筆跡は書き手の癖が現れる個性的なものである。つまり、本テキストの中の斉藤の筆跡は物質性、身体性を持つのである。この筆跡が物質性、身体性を持つということを換言すれば、エクリチュールにパロール性が織り込まれているともいえるだろう。このパロール性によって、エクリチュールの現前性からの断絶という力に抵抗し、元のコンテキストすなわち斉藤の現前性につなぎ止められるのである。このような出版上の戦略によって、地の文と斉藤自身の言葉が差異化され-ロシアフォルマリズム風と言うと異化され-直筆の字の持つ物質性が、斉藤自身をエクリチュールの根源として立ち現せているといえる。つまり、このテキストは、エクリチュールの再演性と、パロールの現前性という本来両立不可能な二つの機能を同時に果たしているのである。

このような現前性からの断絶への抵抗は、もう一つの出版上の戦略にも見ることができる。ここでは、『筆談ホステス』出版後に刊行された斉藤の著書に着目したい。斉藤の2冊目の著書『筆談ホステス 67の愛言葉 青森一の不良が銀座の夜にはぐくんだ魔法の話術』、3冊目の著書『筆談ホステス 母になる ハワイより 61の愛言葉とともに…』、『筆談ホステス』を原作とするコミック本『光文社エンタメコミックス 筆談ホステス〈上〉』には、それぞれ往復はがきがスペシャル付録として収められている。そのスペシャル付録を紹介する本の帯には、「銀座に行けないあなたに朗報! 貴方も筆談ホステス 斉藤理恵さんと直筆で筆談ができる!!!」(斉藤, 2009b)、「この1冊と50円切手2枚で貴方も斉藤理恵さんと筆談ができる!!!」(斉藤, 2010)と書かれている。読者がその往復はがきに手紙を書いて送れば、斉藤の元に届き、さらに斉藤からの直筆の筆談メッセージ付き葉書が返信されるという<sup>(10)</sup>。

実際に斉藤からの直筆の葉書を受け取った読者らは、twitter上にその所感を書き込んでいる。以下にその一部を抜粋する。

「筆談ホステス理恵ちゃんからの返事。『心を受け取ると書いて愛。お心受け取りました。』彼女の言葉や文字は私の心にも愛を教えてください。」(@mamasaya, 2009, Jul 16, twitter)

「たしか2月頃筆談ホステスの本の巻末にあったハガキを出した。今頃返事きた。(泣) ありがとう筆談ホステス。」 (@maejyu, 2010, Jul 16, twitter)

「筆談ホステスの斎藤さん[原文ママ]からお手紙返信きたー!!マジ感動!!」 (@nnaushika, 2010, Jul 18, twitter)

他にも blog や mixi などといった場所で、少なくない数の読者が、「返事」がきたことに「感動」したと綴っている。インターネット上に掲載されている齊藤からの葉書の写真や、読者の所感によると、齊藤からの返信には、『筆談ホステス 67 の愛言葉 青森一の不良が銀座の夜にはぐくんだ魔法の語術』において紹介された言葉のいずれか一つがしたためられていたようである。前述した通り、デリダは、発信者、受信者がともに不在であるエクリチュールは、「コミュニケーションの地平との断絶」(Derrida, 1990/2002. p.25)という特質を持つと述べている。たしかに、コミュニケーションが、互いに伝達したいことを正確に伝えることであるとするならば、齊藤と読者の間にはコミュニケーションの断絶があるのかもしれない。しかし、読者と齊藤が本当に〈伝達したいこと〉が葉書のやり取りによって互いに伝送され得たのかどうかは、ここでは問題ではない。ここで重要なのは、読者は先に齊藤に対し手紙を送っており、それに対する「返事」として、齊藤から直筆の葉書を受け取っているというコンテキストである。つまり、齊藤からの葉書が読者に「返事」として受け取られることにより、齊藤はコミュニケーションの相手として現前するのである。齊藤からの葉書は、こうしたコンテキストと、その直筆の筆跡によって、読者に強く齊藤の現前性を意識させるものとなる。それは、読者の所感の中で、齊藤を「理恵ちゃん」「齊藤さん」と呼び、「ありがとう筆談ホステス」と齊藤に話しかけていることから、読み取ることができるだろう。

こうした出版上の戦略が、齊藤の著書に、「感動ポルノ」として消費されるに終わらない力を与えたと言えるのではないだろうか。

## 6. 終わりに

齊藤の著書は、ホステスというスティグマ化された職業に従事する様子が書かれているにも関わらず、「感動ポルノ」として消費したい読者の欲望によって脱スティグマ化され、美談となった。しかし、齊藤の筆談という行為が生むエクリチュールは、「感動ポルノ」として消費されるに終わらない余剰を生み出した。そもそもパロールを持たない齊藤は、筆談を用いることで、逆説的に、エクリチュールが持つ、現前を超えて反復する力、諸現前の総体と断絶する力、コンテキスト内の諸要素や、現前的な指示対象から間隔化する力を備えつつ、さらにパロール性をも備えるエクリチュール性を手にしたのである。本論文は、齊藤がいかに美談を超えたのか

を分析する中で、エクリチュールの新しい読みの可能性を明らかにした。

斉藤は、『筆談ホステス』を上梓した後、青森市観光大使となり、各地での講演活動を行い、さらには政治家へと転身を成し遂げた。斉藤のテクストは、健常者が障害者に抱く期待によって、単に「感動ポルノ」として消費されるにとどまることなく、政治家への転身というある種の社会的成功を斉藤にもたらしたのである。斉藤はその政治活動において、自身の声で演説をする。斉藤は「私の話す言葉は、健常者には理解できないレベル」(斉藤. 2009a. p.26)と語っており、実際の街頭での政治活動においては、斉藤が自身の声で話した後に、通訳がその指示内容を聴者に伝えるという形態で演説が行われている。彼女の声は、直接的に意味を伝えるものではない。しかし、彼女の声の現前性は、強い力を持つ。それは、彼女が筆談のエクリチュールに現前性を持たせたのと同様に、声の現前性を演説において重視しているからだといえるだろう。

### 注

- (1) 『広辞苑 第六版』を参照した。
- (2) Amazon.co.jp の『筆談ホステス 67 の愛言葉 青森一の不良娘が銀座の夜にはぐくんだ魔法の話術』の紹介文には、「前作(著者注; 『筆談ホステス』)は『中居正広の金曜日のスマたちへ』、『魔女たちの22時』、『とくダネ』、『スーパーニュース』、『ザ・サンデーNEXT』、『朝日新聞』、『読売新聞』、『産経新聞』、『週刊文春』、『週刊新潮』、『女性セブン』、『CanCam』、『an・an』など数々の有力メディアで取り上げられました。」と書かれている。
- (3) ダヴィンチ・ニュース. <https://ddnavi.com/news/264498/a/>を参照せよ。
- (4) MBS. <https://www.mbs.jp/h-hostes/>を参照せよ。
- (5) 『日経エンタテインメント!』2010年7月号において、北川景子は表紙を飾り、掲載されたインタビュー記事においては「期待の若手女優」から、あっという間に「スター女優」の座についた北川景子」と紹介されるなど、認知度・関心度の高い女優であったといえるだろう。
- (6) ビデオリサーチの許諾を得て掲載(無断禁転載・引用)。
- (7) その後、彼女は、ホステス経験を理由とした内定取り消しを不服として日本テレビを相手に民事訴訟を起こすが、裁判で和解が成立し一転採用が確定した。(朝日新聞, 2015, January 9)
- (8) *The Guardian*. <https://www.theguardian.com/australianews/2014/dec/08/stella-young-disability-activist-dies> を参照せよ。
- (9) <https://www.amazon.co.jp/筆談ホステス-斉藤里恵/dp/4334975658> を参照せよ。
- (10) 『筆談ホステス 67 の愛言葉 青森一の不良娘が銀座の夜に育んだ魔法の魔術』、『光文社エンタメコミックス 筆談ホステス〈上〉〈下〉』においては、定められた期間内に往復はがきを送った読者全員に、『筆談ホステス 母になる ハワイより 61 の愛言葉とともに…』では抽選で1万名に、斉藤から直筆のメッセージが返送された。

### 参考文献

- 荒井裕樹. (2019). 「日本文学に描かれた障害者像 ―「頑張る健気な障害者」はどこから来たのか?」. 『福祉労働』. 161, 22-35.
- 大江光子. (2020). 「ホステスは語ることができるか? - 「元ホステス」作家の語りと読者の受容」. 『Gender and Sexuality』. 15, 89-113.
- 「北川景子～ 10代20代女子を夢中にする、ナンバーワン「愛され女優」」. (2010). 『日経エンタテインメント』. 14(11).

- 「金スマ波乱万丈 筆談ホステス 斉藤里恵」.(2009, August 7. 21:00-21:54). 『中居正広の金曜のスマたちへ』. TBS.
- 倉本智明.(2000). 「乙武くん、気をつけて—『五体不満足』はどう読まれたか」. 『木野評論』. 31, 86-92.
- 小島佳祐.(2009, October 6). 「半生をつづった「筆談ホステス」出版 斉藤里恵さん 障害者にも隠れた能力がかならずある」. 東京新聞, 朝刊, 3.
- 好井裕明.(2019). 「文化・メディアにおける障害者表象をめぐって」. 『福祉労働』.161, 8-21.
- 斉藤里恵.(2009a). 『筆談ホステス』. 光文社.
- 斉藤里恵.(2009b). 『筆談ホステス 67の愛言葉 青森一の不良が銀座の夜にはぐくんだ魔法の話術』. 光文社.
- 斉藤里恵.(2009c). 『光文社エンタメコミックス 筆談ホステス〈上〉〈下〉』(蟹江ユアサ, Illus.). 光文社.
- 斉藤里恵.(2010). 『筆談ホステス 母になる ハワイより 61の愛言葉とともに…』. 光文社.
- 竹園元.(Director)(2010, January 10). 「新春ヒューマンドラマ 特別企画 筆談ホステス ～母と娘、愛と感動の25年。届！私の心～」. MBS.
- 玉木幸則.(2019). 「「障害者×感動」の方程式の嘘っぽさ -日常の等身大の障害者とのギャップへの問題提起」. 『福祉労働』.161, 36-45.
- 千葉雄高.(2014, November 15). 「ホステスバイト理由、アナ内定取り消し 「偏見」と日テレを提訴」. 朝日新聞, 朝刊, 30.
- 「何もしゃべらずに銀座 No.1 ホステスになった 25歳魔女」.(2009, July 14, 22:00-22:54). 『魔女たちの22時』. 日本テレビ.
- 「日テレ一転、女子アナ採用へ 内定取り消し訴訟で和解」.(2015, January 9). 朝日新聞, 朝刊, 33.
- 中野真也.(2009, May30). 「筆談ホステス、銀座に生きる 聴力失った25歳、ひたむきさ人気」. 朝日新聞, 夕刊, 13.
- 塙幸枝.(2015). 「映画における障害表象——コミュニケーションの問題として描写される障害」. 『日本コミュニケーション研究』. 43(2), 109-124.
- 塙幸枝.(2018a). 「演じる身体／演じられる身体の虚構性をめぐって——『バリバラ』における障害者パフォーマンスを例に」. 『日本コミュニケーション研究』. 46(2), 151-167.
- 塙幸枝.(2018b). 『障害者と笑い 障害をめぐるコミュニケーションを拓く』. 新曜社.
- 「筆談ホステス」.(2010). 『情報・知識&オピニオン imidas』. 集英社.  
[https://imidas.jp/ryuko/CA-0021\\_CA-5203\\_4.html](https://imidas.jp/ryuko/CA-0021_CA-5203_4.html)
- 「美談」.(2013). 『広辞苑 第六版』. 岩波書店.
- 前田拓哉.(2016a, September 14). 「感動」するわたしたち——『24時間テレビ』と「感動ポルノ」批判をめぐって. SYNODOS. <https://synodos.jp/info/17888>
- 前田拓哉.(2016b). 「「感動ポルノ」で狭まる障害者の生き方」. 『新潮45』. 35(11). 70-73.
- 松田さおり.(2004). 「ホステス」. 『性の用語集』. 講談社.
- 松田さおり.(2006). 「ホステスの移動を考える」. 『現代風俗 移動の風俗「成りあがり」から「お遍路」まで』. 新宿書房 .
- 松田さおり.(2010). 「水商売」. 『性的なことば』. 講談社.

- 宮澤弘道. (2019). 「道徳教科書における障害者像 –差別・偏見を助長する「特別の教科 道徳」. 『福祉労働』. 161, 70-78.
- 「元筆談ホステス・現東京都北区議員の斉藤りえ、母との確執や子育て、障がいとの向き合いを告白」. (2015, October 19,). 『ダヴィンチニュース』. KADOKAWA. Retrieved July 24, 2020, from <https://ddnavi.com/news/264498/a/>
- 矢吹康夫. (2019). 「「アルビノは美しい」って言っちゃダメなの?」. 『福祉労働』. 161, 46-53.
- 吉田健一. (2009, August 21). 「自叙伝「筆談ホステス」を出版した 斉藤理恵さん」. 読売新聞, 東京朝刊, 2.
- Barthes, R. (1979). 『物語の構造分析』 (花輪光.Trans.). みすず書房=(Original work published 1966). *L'analyse structurale du récit*.
- Compagnon, A. (2010). 『第二の手、または引用の作業』 (今井勉.Trans.). 水声社=(Original work published 1979). *La seconde main ou le travail de la citation*. Éditions du Seuil.
- Derrida, J.(1984). 『根元の彼方に-グラマトロジーについてについて (上)』 (足立和浩. Trans.). 現代思想社=(Original work published 1967). *De la grammatologie*. Les Éditions de Minuit.
- Derrida, J.(2002). 「署名 出来事 コンテキスト」. 『有限責任会社』 (高橋哲哉, 増田一夫&宮崎裕助. Trans.). 法政大学出版局=(Original work published 1990). *Signature Event Context*. Limited Inc., Galilée.
- Melissa, L, D. (2014, December 7). Stella Young, disability activist, dies at 32. *The Guardian*. Retrieved July 24, 2020, from <https://www.theguardian.com/australianews/2014/dec/08/stella-young-disability-activist-dies>
- Stella, Y. (2012, July 2). We're not here for your inspiration. *RAMP UP*. Retrieved July 24, 2020, from <https://www.abc.net.au/rampup/articles/2012/07/02/3537035.htm#comments>
- Stella, Y. (2014). I'm not your inspiration, thank you very much. TEDxSydney. Retrieved July 24, 2020, from [https://www.ted.com/talks/stella\\_young\\_i\\_m\\_not\\_your\\_inspiration\\_thank\\_you\\_very\\_much](https://www.ted.com/talks/stella_young_i_m_not_your_inspiration_thank_you_very_much)